

ヨハネの黙示録が宛てられた小アジアの七つの教会の中で、今日は三つ目の教会である「ペルガモン教会」である。この教会に充てられた手紙の内容を理解するために先に当時のこの地域のことを知ることが大切である。

ペルガモン(現在のトルコ・ベルガマ、前回のエフェソ《今のイズミル》から北へ127キロの距離)は、エフェソやスミルナに比べると商業都市としての規模はやや劣っていたが、ローマ帝国の「アジア州の首都(総督府所在地)」として、政治的・宗教的に絶大な権力を握る都市であった。この都市名は、動物の皮をなめして作る「羊皮紙(ギリシャ語:ペルガメーネー)」の語源となったことでも知られ、エジプトのアレクサンドリアに次ぐ世界第二位の巨大な図書館を擁する学問と文化の中心地でもあった。

黙示録の文脈において最も重要なのは、ペルガモンが「異教礼拝と皇帝礼拝の総本山」であったという事実。町にはゼウスの巨大な大祭壇がそびえ立ち、また「救い主」と呼ばれた医神アスクレピオス(蛇をシンボルとする)の神殿には、癒やしを求めて世界中から人々が巡礼に訪れた。さらに、紀元前29年にはアジア州で初めて「ローマ皇帝(アウグストゥス)を神として祀る神殿」が建設され、国家権力と偶像礼拝が完全に一体化していた。ローマの総督は、反逆者を処刑する「剣の権能」を持っており、皇帝礼拝を拒否するキリスト者はいつでも死刑に処される危険と隣り合わせであった。

このような町に生きる信者たちに、キリストはこの手紙を書き送られたのである。

12-13節、「ペルガモンにある教会の天使にこう書き送れ。『鋭い両刃の剣を持っている方が、次のように言われる。「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかし、あなたはわたしの名をしっかりと守って、わたしの忠実な証人アンティパスが、サタンの住むあなたがたの所で殺されたときでさえ、わたしに対する信仰を捨てなかった。』」

ここではイエス・キリストを「鋭い両刃の剣を持っている方」として示す。これは、ローマ総督が持つ死刑執行の「剣の権能」が意識されている。地上の総督が信者の肉体を殺す剣を持っていたとしても、真に究極的な生死の権限、そして最後の裁きの剣を持っているのは、万物の王であるイエス・キリストであることを示す。

主イエスはペルガモンを「そこにはサタンの王座がある」と言われる。ゼウスの大祭壇や皇帝礼拝の神殿が立ち並ぶこの町は、まさに悪魔的な権力が可視化された場所であったのであろう。

ペルガモンの信者たちは、「カエサル(皇帝)は主なり」と告白しなければ社会から抹殺される状況にあった。事実、「アンティパス」という人物が、皇帝礼拝を拒否したために殉教の死を遂げていた(アンティパスが呼ばれた「証人: μάρτυς(マルトウス)」というギリシャ語は、後に「殉教者: マーター(martyr)」の語源となる)。

指導者が目の前で殺されるという恐怖のただ中であっても、彼らはイエス・キリストの名を否まない、驚くべき勇敢な信仰を保っていた。

14-15 節、「しかし、あなたに対して少しばかり言うべきことがある。あなたのところには、バラムの教えを奉ずる者がいる。バラムは、イスラエルの子らの前につまずきとなるものを置くようにバラクに教えた。それは、彼らに偶像に献げた肉を食べさせ、みだらなことをさせるためだった。同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉ずる者たちがいる。」

外部からの恐ろしい迫害に対しては一步も引かなかったペルガモン教会であったが、キリストは彼らが「教会の内側」に致命的な妥協を抱え込んでいることを厳しく指摘している。それは「バラムの教え」と「ニコライ派の教え」の容認である。

この二つのグループは本質的に同じもの。旧約聖書の民数記(22~25 章)に登場する「バラム」は、呪いによってイスラエルを倒せなかったため、モアブの女たちを使ってイスラエルの男たちを誘惑し、偶像の神殿での宴会と性的不品行に陥らせることで、神ご自身による裁きを招かせるという「つまずき」を置いた。「ニコライ派」も全く同じ手法を取った。

一説によると、「ニコライ(ニカオ+ラオス)」は、ギリシャ語で「民を征服する者」を意味し、ヘブライ語の「バラム(民を飲み込む者)」に相当するという。ペルガモンのような都市では、商業者たちのいわば「労働組合」のような会合は、必ず異教の神殿で行われ、偶像へのいけにえの肉を食べ、みだらな宴会に参加することが「社会人としての常識」であったよう。ニコライ派は「キリストの恵みによって救われているのだから、肉体で何をしても魂は汚れない」という誤った自由(反律法主義)を説き、信者たちに偶像の宴会への参加を推奨した。

エフェソ教会はこれを激しく憎み退けた(2章6節)が、ペルガモン教会は、命がけの迫害には耐えたにもかかわらず、日々の生活やビジネスの付き合いにおける「少しの妥

協]に対しては誤った寛容さを示し、偽教師たちを教会内に放置(容認)してしまっていたのである。

16節。「だから、悔い改めよ。さもなければ、すぐにあなたのところへ行って、わたしの口の剣でその者どもと戦おう。」

イエス・キリストは教会全体に「悔い改めよ」と迫る。これは単にニコライ派の者たちへの警告ではなく、「彼らを放置し、悪に対して寛容を装っている教会全体」への厳しい叱責である。キリスト教会内での間違った教えにより信徒を墮落させることは大きな罪となる故、悔い改めが求められる。もし悔い改めず、教会として毅然とした態度をとらないのであれば、キリストご自身がその「口の剣(真理と偽りを鋭く切り裂き、裁きを下す御言葉の権威。「霊の剣、すなわち神の言葉」エフェソ6章17節)」をもって、妥協した者たちと直接戦うと言われる。

17節。「耳ある者は、“霊”が諸教会に告げることがよい。勝利を得る者には隠されていたマナを与えよう。また、白い小石を与えよう。その小石には、これを受け取る者のほかにはだれにも分からぬ新しい名が記されている。」

異教の宴会(偶像への供え物)を拒否すれば、彼らは社会から孤立し、経済的に困窮するかもしれない。しかし、妥協を拒んで「勝利を得る者」には、キリストから最高の祝宴が約束されている。

「隠されていたマナ」とは、旧約時代、神が荒れ野でイスラエルの民を養った天からのパンのこと。この世の汚れにまみれた宴会の肉を拒む者には、キリストご自身が「命のパン」となり、永遠の霊的な命をもって彼らを養い、満たしてくださるという約束。

「白い小石」と「新しい名」。当時の社会において、「白い小石」は「裁判での無罪放免の判決」や「特別な祝宴への招待状(入場券)」として用いられていた。また、そこに刻まれた「新しい名」とは、キリストとの親密な個人的関係と、私たちが「完全にキリストの所有とされた」ことを示すものである。皇帝礼拝を拒否してこの世の市民権を失ったとしても、神の国への確かな入場券と、決して消えることのない天の市民としての新しい身分が保証されている。

ペルガモン教会への手紙は、「迫害には強いが、誘惑には弱かった教会」に対する心探られるメッセージと言える。彼らは「サタンの王座」の足元で、命の危険が迫る「皇帝礼拝の強要」という目に見える巨大な敵に対しては、見事に信仰を死守した。しかし、彼らが足をすくわれたのは、もっと身近で、巧妙な「世俗社会との同化(ニコライ派の教え)」であった。「社会で生きていくためには、この程度の妥協は仕方がない」「みんなや

っているビジネスの付き合いだ」「心の中でキリストを信じていれば、外側の行動は合わせても問題ない」、こういったニコライ派の教えは、現代の私たちにも形を変えて囁きかけてくる。

ペルガモン教会に対し主イエス・キリストの語る言葉は、真の信仰の戦いが「目に見える敵との戦い」だけでなく、「目に見えない内なる誘惑(妥協)との戦い」であることを教えているといえよう。イエス・キリストは、私たちがこの世の価値観と「馴れ合い」になり、神の聖さを薄めてしまうことを激しく憎まれる。私たちは、愛や寛容という名目で、教会や自分自身の生活の中に「罪」を放置してはいないか。

主の御言葉である「鋭い両刃の剣」によって、自分の内なる妥協を切り裂いていただく。この世の宴会(目先の利益や地位)に背を向けることは、時に孤独や損失を伴うかもしれない。しかし恐れることはない。主イエスは、妥協を拒むキリスト者のために「隠されたマナ」を用意し、その人がキリストの愛する者であることを証明する「新しい名の記された白い小石」を、すでに御手の中に握って待っておられるからである。